

氏 名 邱君妮

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2289 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究——台湾の
桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に

論文審査委員 主 査 園田 直子
比較文化学専攻 教授
吉田 憲司
比較文化学専攻 教授
野林 厚志
地域文化学専攻 教授
布谷 知夫
三重県総合博物館 特別顧問

博士論文の要旨

氏名 邱君妮

論文題目 包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究

—台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に

本研究は、博物館が、多様化し、複雑化する社会のなかで、異なる文化間の対話をどのように実現させるのかについての方法論を見いだすことを目的としている。そこで、本論文では、博物館を巡る国際的な動向と台湾の博物館の展開に注目する。その上で、積極的に市民参画を受け入れている台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の活動を考察し、包摂的かつ協働的な博物館活動の方法論を明らかにする。

筆者の考える包摂的かつ協働的な博物館活動とは、1970年代の「新博物館学」をはじめとする博物館の概念に関する議論をもとにしている。これらの議論では博物館における「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」、「包摂性」が大きな話題となっており、現在の博物館活動を行なう重要な視点として定着してきている。本論文において「包摂性」と「協働性」は、「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」を実践する方法論として捉えている。その上で、包摂的かつ協働的な博物館活動について着目し、さらに台湾社会のなかで求められる包摂的かつ協働的な博物館活動の在り方について考察を進めた。その結果、博物館は、社会環境が大きく変化している現代において、文化遺産の保存や活用、知識の創出に加え、包摂的かつ協働的な活動を通じて、多視点の表現を博物館で実践する新たな役割を担っていることを明らかにした。また、多様で公平な社会変革を促進するための拠点になる必要があることを示した。

本論文は、序章、5つの章、終章という構成になっている。序章では、研究の背景及び目的、先行研究の整理を行なった。「新博物館学」などの1970年代以降の諸概念をめぐる議論を紐解きながら、包摂的かつ協働的な博物館活動の基本的な要素と考え方を把握し、今後の公平な社会へ変革のためにそれらが重要であることを明確にした。また、社会に開かれた博物館としてのアプローチとして応用された市民参画について、博物館専門職員と市民の主体性、自立性の相互関係という研究課題の所在を示した。

第1章では、博物館に関する国際組織の活動に着目し、それぞれの組織で展開している「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」、「包摂性」に関する活動を振り返り、博物館の国際的な動向を把握した。なかでも博物館の定義の見直しに向けて作業を進めているICOMの動きを通して、これからの博物館活動では、包摂的で協働的なプロセスを通じて、多視点を形成することが重要であることを指摘した。また、そうした視点で実践されている博物館活動の事例を考察し、「包摂性」と「協働性」の活動の実践には市民参画を取り入れることの有用性を示した。その上で、社会と博物館の在り方の相互関係について、博物館が包摂的かつ協働的な活動を通して社会と接続することの重要性、また「包摂性」と「協働性」が一体となることの必要性を確認した。また、こうした博物館活動を通じて、博物館がより良い社会へと変革する拠点としての役割を果たすことを明らかにした。さらに、そのことが第2章以降の台湾の事例研究の背景となっている。

第2章では、歴史的及び社会的背景から、包摂的かつ協働的な博物館を求める台湾の状況について述べた。19世紀以降の台湾の文化政策と博物館事業の展開を整理した上で、台湾社会の変容、とくに戒嚴令解除後の民主化の中で、政策として導入された「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」、「包摂性」を重視した博物館活動が、地域住民主体の博物館活動へと変遷していく状況を論じた。また、それぞれの族群による相互理解に向けて、文化行政に力を入れてきた台湾の事情を解き明かし、台湾における「多元文化社会」を支える拠点の一つとしての博物館の役割を確認した。

第3章では、台湾の博物館事業を包摂的かつ協働的な方向へ導いた重要な政策である「社区総体營造」と「地方文化館計画」の2つの政策を中心に論じた。そして、台湾は市民参画社会を軸として、多様で公正な社会を構築するために、博物館が拠点となって包摂的かつ協働的な活動を展開しており、その結果、「包摂性」、「協働性」の2つの概念は、台湾の独自の展開により、一体の方法論となっていることを明らかにした。

第4章と第5章では、包摂的かつ協働的な台湾の博物館の具体例として、桃園市大溪区にある大溪木芸生態博物館を取り上げた。まず、大溪木芸生態博物館が設立していく歴史的背景を整理した上で、地域と博物館の関係性を考察した。また、博物館で行なわれた地域住民を主体とした博物館活動について考察した。その結果、博物館専門職員と地域住民の両者の協働によって、博物館で包摂性の実現され、「多様性」、「公平性」、「アクセシビリティ」の実践につながることを明らかにし、両者の主体性と自立性、そしてその相互関係から博物館活動の在り方について論じた。

終章では、第1章から第5章の論述を踏まえ、包摂的かつ協働的な博物館活動を実践するためには、市民の主体性や自立性だけではなく、博物館の意思決定を持つ博物館専門職員の必要な姿勢、市民参画を取り込む博物館活動の在り方について論じた。

まず、博物館が積極的に日常生活のなかで博物館活動を行なう機会を創り出すべきであることを示した。そして、市民の自主性や主体性を強化し、異なる主張や立場を持つ人との協働力を育てるためには、市民参画を内包する博物館システムにさらなる検討を加えていく必要があることを提示した。次に、市民と博物館活動における資源の作り方や使い方を共有し、博物館活動の意義を共感させ、自発性を促すことが重要となることを示した。

一方、包摂的かつ協働的な博物館活動の実践には、博物館の意思決定を持つ博物館専門職員は、どれだけ自身の固定概念に縛られているかを意識し、自己省察を行ない、市民の主体性が必要であることの認識が必須であることを指摘した。また、博物館専門職員としての研究の蓄積を積み重ねていかなければならないことを指摘した。

さらに、既存の博物館の枠組みのなかで、包摂的かつ協働的な市民参画の導入は、現実的に難しいという課題について、例えば、対象が異なる博物館どうしの連携を促進することを提示した。博物館が連携するということは、それぞれの博物館の考え方を包摂し（共存させる）、協働することが求められる。こうした活動の積み重ねが、最終的に「市民参画」を実現させる博物館へと成長させ、包摂的かつ協働的な博物館活動が実践できるプロセスとなっていくことを示した。その結果、多様で公平な社会への変革を促す拠点としての博物館が創出できることを最後に提示した。

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 邱君妮

Title
論文題目 包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究——台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に

本論文は、博物館の国際的な動向と、台湾独自の文化政策に着目したうえで、市民参画を積極的に実践している台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館（以下、木博館）の事例分析をとおして、地域住民との関係から地域博物館の課題を考察したものである。木博館は、位置する大溪地域全体をエコミュージアムとするコンセプトの拠点として位置づけられており、行政が直接運営する「博物館」と地域住民が運営する街角館で構成されている。

申請者は、包摂性と協働性を、世界の博物館で重要視される DEAI（「多様性 Diversity」「公平性 Equity」「アクセシビリティ Accessibility」「包摂性 Inclusion」）を実践する方法論として捉え、包摂的かつ協働的な博物館活動を軸に論を進める。

序章では、20 世紀末から 21 世紀にかけての博物館の機能や社会的使命を巡る議論を整理している。新博物館学、エコミュージアム、フォーラムとしての博物館、第三世代博物館、地域博物館など、社会に開かれた博物館を提唱するこれらの概念は、それまでの博物館のありかたに対する反省をもとに博物館の本質を再考するものであった。

第 1 章では、博物館をとりまく国際的な動向に注目する。非政府組織の ICOM（国際博物館会議）をはじめ、博物館に関する国際的な活動をおこなっている AAM（アメリカ博物館連盟）や MA（イギリス博物館協会）の動きを詳細かつ明快地に整理し、包摂的かつ協働的な博物館をめざした様々な活動を検証している。

第 2 章では、DEAI の実践を求める台湾の歴史的・社会的背景を、その文化政策や博物館行政を時間軸に沿って追いながら読み解いている。地域住民を主体とした博物館活動の展開は、台湾がおかれた国際環境と、1987 年の戒厳令解除以降の「多文化社会」を目指す台湾の国策と密接に関連していることが示されている。

第 3 章では、台湾の文化政策である「社区総体营造」と「地方文化館計画」を取り上げる。「地方文化館計画」の事業内容の変化から、台湾の文化政策が、地域文化を基盤とした市民参画による文化の構築へと移行したことが示されている。民主化の実現と博物館の発展が同時に進められた台湾の特徴が明らかになる。

第 4 章と第 5 章は、包摂的かつ協働的な博物館活動を実現している木博館の事例分析である。第 4 章では、木博館の設立の背景が整理されている。第 5 章では、市の担当者、木博館の職員、街角館の運営者、それらのボランティアへの詳細なヒアリングをもとに、木博館での地域住民主体の活動に焦点があてられている。鍵となる「共学」とよばれる研修活動では博物館職員と地域住民は同等であり、地域住民の主体性や自立性の変化にあわせて協働的に学習する内容を変える等、多視点の会話を保つ仕組みが形成されている。地域住民との協働活動は、研究者をはじめとする専門家と地域住民の境界をなくし、地域住民自身が生活の記憶を掘り起こすなど、館の方針にも影響を与えている。

終章では、各章で展開した論述が整理され、台湾、さらには世界の博物館における包摂的かつ協働的な博物館活動の実現に向けての方法論が提示されている。博物館において多様な市民を包摂するには、博物館が積極的に日常生活のなかに博物館活動を行う機会を創り出すことが必要であると指摘されている。包摂的かつ協働的な博物館のありかたについては、市民参画の活動予算を博物館単独の予算で継続的に策定するのは現実的ではなく、市民や市民団体と協働し、新たな予算獲得のシステムをつくる重要性があげられている。博物館における多元文化の理解のための方法論としては、博物館が多様性を受け入れ、公平な社会へと変革させる拠点を目指すことで、中立性を保つことができるとした。また、博物館職員の自己省察と、繰り返し変革できる博物館の組織づくりが重要とした。博物館職員は、博物館に参画する市民の主体性や自立性を尊重しつつ多様な立場の声を客観的にとりまとめる役割を果たすが、学術的観点からは必ずしも見いだせないものを気づかせる、地域住民の新たな視点を取り入れる勇気が必要であることも強調されている。

本論文の学術的意義としては、博物館の使命や役割に関わるグローバルな議論、台湾社会における歴史経験と文化行政の変遷の中に、台湾の地域博物館を位置づけたという点があげられる。とくに第二次世界大戦後の台湾社会が経験する戒厳令下から民主主義の実現、その中で生じた地域住民の意識の変化の中に、地域の博物館を位置づけたことは、台湾が博物館の国際的な動向の影響を受けながらも、独自の博物館のありかたを模索してきたことを明快に示した。台湾にとどまらず、他の国や地域における博物館のありかたの変化を議論していくうえでも、検証すべき視点を与えている。

つぎに、地域の博物館と地域住民との関係を築いていくための実践に関わる議論への貢献である。地域社会の中での博物館の役割は、日本でもまた世界的にもさまざまに議論されているが、参考となる事例は少ない。そのようななか、本論文は台湾の一つの町での事例として非常に具体的で参考になる。木博館では、博物館職員と住民とが対等の立場で議論し、博物館の運営がなされており、両者の協働によって博物館の包摂性が実現している。多文化共生社会の実現の拠点となりうる新しい博物館のありかたを提示するものとして評価でき、その動きを同時進行の形で参与観察することで追求しようとしたのは申請者の慧眼といえる。共学とよばれた、行政側と地域住民とがともに考える博物館の運営のありかたは、学術知が優先されてきた神殿としての博物館のありかたに一石を投じる、地域博物館のよりどころのひとつになりうるであろう。

また、世界の博物館の動きに関する論述において、文献調査やフィールドワークで得た知見を、関連会議への出席や担当者へのインタビューで丁寧に補完している点についても評価しておきたい。とくに、2019年に京都で開催された ICOM（国際博物館会議）の世界大会 ICOM 京都 2019 の準備室の研究者として3年間にわたり大会の準備にかかわり、ICOM 中枢部の動きと議論を間近で見聞してきた申請者の経験が活かされている。京都大会で採択が先送りされた ICOM の博物館定義の見直しをめぐる議論の記述は、そのまま現代の ICOM と世界の博物館・美術館のおかれた状況を凝縮したものとなっている。

このように本論文は、20世紀後半から21世紀にかけての世界の博物館の潮流と、台湾の博物館の動きを動的に捉えることに成功しており、良質の「博物館誌」(museography)として、また21世紀の多文化共生社会に向けた博物館のありかたを提言するニュー・ミュージオロジー（新博物館学）の達成として、博物館学の視点から高く評価できる。

とはいえ本論文にも、課題として指摘すべき点がないわけではない。上述したさまざまな成果を達成しているにもかかわらず、結論の中でそうした達成を総括し、本論文が世界の博物館学、あるいは台湾の博物館学においていかなる位置づけをもつものなのかを明記することがなかったことは惜しまれる。また、台湾の博物館に関する用語は、日本で使われている用語と同じであっても必ずしも同じことを指していないため、日本との違いに関する記述があれば、台湾の独自性がより明確になったと思われる。

木博館の調査、分析においては、行政側と地域住民の博物館運営の主体性が議論の中心になっているため、博物館運営の基礎になるモノの保存と展示、調査、来館者と博物館との関係については必ずしも踏み込んだ議論がない。また、木博館の活動がいかに持続可能な形で今後継続されていくのかに関する展望、その活動が台湾のなかで、そして国際的にみて、どのように評価されているのかは本研究におけるさらなる課題と言えるだろう。

ただ、口頭試問の中でこれらの点について審査委員から質問したところ、申請者からは極めて明快な回答が得られ、論を補充する用意は十分に整っている。上述の課題は、本論文で明らかとなった台湾の文化政策、木博館の特徴をふまえたうえで、今後、発展的に探究すべきものであり、本論文の達成をいささかも損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位授与に値すると判断した。